

# 存在論的恐怖が達成事象の主観的時間的距離に及ぼす影響 ：自己高揚と一貫性希求の比較検討

協本 竜太郎 \*

## Effects of mortality salience on subjective temporal distance of achievement-relevant events: A comparative examination between self-enhancement and self- consistency strivings.

by Ryutaro WAKIMOTO

存在脅威管理理論に基づく研究は、存在論的恐怖の顕現化が自己高揚を動機づけることを示してきた。一方、近年の研究は、存在論的恐怖により自己概念の一貫性希求が生じることを示している。本研究では、両者が相反する状況で存在論的恐怖がいずれを動機づけるのかを、学業領域の成功と失敗の主観的時間の距離を指標として検討した。実験1では、存在論的恐怖が顕現化する状況で、自尊感情が高い者は失敗の、自尊感情が低い者は成功の主観的時間の距離がより遠くなることが示された。実験2では学業の自己価値随伴性が高く学業自尊感情の低い者で、存在論的恐怖が成功の主観的時間の距離をより遠くするという結果が得られた。一方、学業領域の随伴性と学業自尊感情の双方が低い者は、存在論的恐怖について考えると成功の主観的時間の距離が近くなるという結果が得られた。本研究の結果は、自己高揚よりも一貫性希求が優先される場合があることを示している。

Research based on terror management theory has shown that mortality salience instigates self-esteem strivings. However, recent study suggests that mortality salience engender not only self-esteem strivings but also strivings for self-consistency. The present article examines whether mortality salience increase consistency-strivings or self-esteem strivings when they are incompatible, employing subjective temporal distance of academic success and failure as dependent variables. Experiment 1 found that following mortality salience, individuals with low self-esteem report greater temporal distance of a success, while the high self-esteem counterpart report greater temporal distance of a failure. Experiment 2 showed that individuals with high academic contingency and low academic self-esteem report greater temporal distance of a success following mortality salience. Unexpectedly, individuals with low academic contingency and low academic self-esteem report smaller temporal distance of a success in response to mortality salience. These results indicate that under a certain condition, mortality salience instigate consistency-strivings rather than self-esteem strivings.

キーワード：存在脅威管理理論，自己概念の一貫性，自尊感情，主観的時間の距離

Keywords: terror management theory, self-consistency, self-esteem, subjective temporal distance

### 問題と目的

存在脅威管理理論 (Greenberg, Pyszczynski,

& Solomon, 1986; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997) に基づく研究は、自尊感情が存在論的恐怖 ( 自己の死が不可避であるという認

---

\* 明治大学情報コミュニケーション学部 専任講師

「本論文は、情報コミュニケーション学部紀要編集委員会により指名された複数の匿名レフェリーの査読を経たものである。  
This paper was duly reviewed and accepted by the anonymous referees who were appointed by the editorial committee of the School of Information and Communication」

識から生じる恐怖)を緩衝する文化的的不安緩衝装置であると主張している。同理論に基づく研究では、実際に自尊感情が死に関連する不安を低減することが示されている。さらに、存在論的恐怖を意識させる操作が自己高揚(自尊感情を高めるような現象の解釈や情報収集の在り方)を動機づけることを示している。

一方、近年の研究では、存在論的恐怖が自己概念の一貫性希求を動機づけることが示唆されている。当該研究では自己高揚と一貫性希求が併存する状況で検討が行われている。しかしながら、自己高揚と一貫性希求は相反することがあり、そのような状況で存在論的恐怖がどちらを動機づけるのかについては検討が行われていない。そこで、本研究では、達成領域(特に学業領域)の過去経験の認知に着目して、自己高揚と一貫性希求が相反する状況で、存在論的恐怖がいずれを動機づけるのかを検討する。

## 文化的世界観を通じた存在論的恐怖への対処

まず、存在脅威管理理論が着目する存在論的恐怖について明確にしたい。存在論的恐怖とは、前述の通り自己の死が不可避であるという認識から生じる恐怖である。自己の死が不可避であるという認識には高度な認知能力が必要であるため、存在論的恐怖は人間特有のものであると考えられている。また、存在論的恐怖は、眼前に迫った死の危険に対する恐怖とは質的に異なるものである。眼前に迫った死の危険は回避や解決の可能性が残されているが、自分がいつか死ぬということ自体は回避も解決もできないことである。それゆえ、眼前に迫った死の恐怖は回避や解決のための即時的反応を動機づけると考えられるが、存在論的恐怖にはそのような機能が存在しないと考えられる。

高度な認知能力を前提とし、究極的に解決も回避も不可能であるという点が、存在論的恐怖の特徴である。

存在論的恐怖は解決不可能であるが、大半の人は普段死の恐怖に脅かされていない。それどころか、身近な人や著名人の死をきっかけに、自己の死について冷静に考えることもできる。このようなことが可能なのは、我々が存在論的恐怖に対処する心的メカニズムを持つためである、と存在脅威管理理論は主張する。

その心的メカニズムの核となるのは文化的世界観である。文化的世界観とは集団内で共有された信念体系であり、宗教や思想などがその代表的な例である。文化的世界観は無秩序な自然の世界の成り立ちに説明を与え、秩序ある社会的な現実にも再構成する。さらに、文化的世界観に含まれる規範は、何が適切な行動なのかについての指針を与える。これらのことは、存在論的恐怖の不確実性に関する側面を主観的に軽減すると考えられる。

文化的世界観の機能として特に存在論的恐怖に対する防衛(象徴的防衛)において重要なのは、それらが不死概念(不死に関する信念)を与える点である。この不死概念には2種類のものがある(Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991)。1つは、自己の生が死後にも拡張されるという直接的な不死である。極楽浄土や天国、輪廻転生といった発想は、直接的な不死に該当するものである。他方は、自分の生そのものは終わっても、自己の一部が何らかのものの中に残り、この世に存在しつづけるという象徴的な不死である。自身の業績や作品が後世に伝わる、あるいは親しい人の中に自分の存在が残りつづけるといった考えが、象徴的な不死の例である。直接的な不死や象徴的な不死は自己の存在を象徴的に拡張することで、存在論的恐怖を緩衝する。

さらに、文化的世界観は人間に、他の動物とは

異なる、社会的役割や意味を持った象徴的な存在としての枠組みを与える。人間も他の種と同様に動物であるが、その動物性を意識することは存在論的恐怖を思い起こさせる (Cox, Goldenberg, Pyszcynski et al., 2007)。象徴的な存在の枠組みは、人間の動物的側面を覆い隠し、他の動物とは異なる存在として自己を意識させることで、存在論的恐怖の緩衝に寄与するのである。

## 存在論的恐怖への対処における自尊感情の必要性

上記のように、文化的世界観は3つの経路で存在論的恐怖を緩衝しうる。しかしながら、文化の構成員全てがその恩恵にあずかることができるわけではない。象徴的不死概念や象徴的存在の枠組みを獲得しうるのは、文化的世界観の価値基準に合致した望ましい人物のみである (Greenberg et al., 1986)。天国や極楽浄土で救済されるのは教義に従った善良な者である、という発想は多くの宗教に見られる。後世に残る作品や業績というものはそもそも文化的な価値基準に合致したものであるし、他者の心に残るのも望ましい対人関係を築けた人のみであろう。社会的役割や意味についても、個人が所属する文化において一定の基準を満たす人に与えられるものである。そして、価値基準から逸脱した者は重要な役割や意味を与えられず、低い社会経済的地位に追いやられることがしばしばある。文化的世界観の緩衝効果を楽しむには、文化的世界観の価値基準を満たしていることが必要なのである。そして、存在脅威管理理論では、この文化的世界観の価値基準を満たしているという主観的感覚こそが自尊感情であるとしている。言い換えれば、人が自尊感情の獲得に強く動機づけられているのは、存在論的恐怖に対処するためである、ということである。

自尊感情が存在論的恐怖への対処に寄与するという主張は、多くの研究で支持されている。まず、特性的に自尊感情が高い者や、実験操作により自尊感情を一時的に高められた者は、死に関連する映像を視聴した後の主観的不安の程度 (Greenberg, Pyszcynski, Burling, et al., 1992) や脆弱性の否認傾向 (Greenberg, Pyszcynski, Solomon et al., 1993) が弱いことが報告されている。また、実験操作によって存在論的恐怖を顕現化すると、自己奉仕的帰属 (Mikulincer & Florian, 2002)、身体に自尊感情を持っている者の身体に対する選択的同一化 (つまり自己の肯定的側面への同一化; Goldenberg, McCoy, Pyszcynski et al., 2000) など自己高揚が強まることが示されている。これらの個人的な形の自己高揚のみならず、肯定的な含意を持つ集団への同一化 (Dechesne, Greenberg, Arndt et al., 2000) など集団所属を通じた間接的な自己高揚も、存在論的恐怖が顕現化する状況で強まることが報告されている。

## 一貫性動機への拡張

このように、存在脅威管理理論に基づく研究は自己高揚に焦点を当ててきた。しかしながら近年、自尊感情のみならず、自己概念の一貫性も存在論的恐怖への対処に寄与することが示唆されている。自己概念の一貫性が死の恐怖への対処に寄与するという主張自体は以前から存在する (例えば Becker, 1973/1997) が、この主張を実験的に検討したのが Landau, Greenberg, Sullivan, Routledge, and Arndt (2009) である。彼らは、構造欲求 (環境に構造や秩序を求める傾向) の強い者が、存在論的恐怖が顕現化する状況で、自己の特性を明確に理解することへの関心を強め (Study 1)、自己の特性の評価が明確になり (Study

2), 自己複雑性を低く報告するようになる (Study 3) ことを報告している。これらは、存在論的恐怖が自己概念の明確さや一貫性の希求を動機づけることを示唆するものである。Landau らはさらに、存在論的恐怖が顕現化すると構造欲求の強い者は最近の経験の説明に因果関係を示す語をより多く使うようになり、また過去の出来事と現在の自己との間に有意味なつながりが存在すると考えるようになることを報告している。これらの反応は、自伝的記憶を通じて自己の一貫性を確認する反応だと解釈することができる。

一貫性希求が存在論的恐怖の緩衝に寄与すると主張するためには、一貫性希求と自己高揚を峻別して検討を行う必要がある。なぜならば、自己概念の一貫性が自尊感情と中程度の正の相関関係を持つからである (Campbell, Assanand, & Paula, 2003)。この問題について、上述の Landau らは自己概念の明確性・一貫性希求反応と同時に自己高揚反応を測定することで対処している。彼らの研究では存在論的恐怖の一貫性希求反応に対する影響が構造欲求に調節される一方、自己高揚反応は調節されず、このパターンの違いから、存在論的恐怖顕現化時の一貫性希求反応が、自己高揚反応に過ぎないという代替説明を排除できると主張している。

## 自尊感情が低い者についての異なる予測

Landau らの知見は一貫性希求と自己高揚反応が質的に異なることを示唆すると同時に、存在論的恐怖が顕現化する状況で両者が併存しうること示唆している。しかしながら、一貫性希求と自己高揚は相反することがある。それは、自尊感情が低い者が自己にとって肯定的な情報を受け取る場合である。一般的に、自己に肯定的フィードバックを受け取ることは自己高揚動機を満たす機会と

なる。しかしながら、自尊感情が低い者にとっては、それは自己概念と一致しない情報を得ることをも意味する。このような、一貫性希求と自己高揚が相反する状況において、存在論的恐怖がどちらを生ぜしめるかについては未だ検討が行われていない。自尊感情が存在論的恐怖への対処に重要な役割を果たすと考える存在脅威管理理論の見地からは、自己高揚が優先されると考えられる。しかしながら、自己認識に関わる動機の中では自己高揚動機の影響力が強い一方で、状況によっては、自己査定や自己確証といった他の動機の影響がより強く顕れることがある (Sedikides & Strube, 1997)。それゆえ、この点を実証的に検討することは存在脅威管理理論における自尊感情の位置づけや象徴的防衛の様態を理解する上で重要な意味を持つ。

自己高揚が優先されるのだとすれば、自尊感情が低い者は存在論的恐怖が顕現化する状況で自己に肯定的な情報に接近し、否定的な情報を回避すると考えられる。自尊感情が高い者についても、身体的自尊感情が高い者が存在論的恐怖が顕現化する状況で身体への同一化を強める (Goldenberg et al., 2000) という知見に鑑みれば、同様のパターンを示すと考えられる。よって、自尊感情の高低に関係なく、存在論的恐怖が自己に肯定的な情報への接近もしくは否定的な情報の回避を動機づけると考えられる。

一方、一貫性希求が優先されるのだとすれば、存在論的恐怖の効果はもともとの自尊感情と受け取る情報の望ましさの組み合わせによって異なると考えられる。Giesler, Josephs, and Swann Jr. (1996) は、自尊感情が低い者は自己に関する否定的フィードバックを肯定的フィードバックよりも正確だと評価し、またそのようなフィードバックを選好することを報告している。また、Boucher (2011) は、存在論的恐怖が顕現化する状

況で、自尊感情の高い者は自己の特性の評価が明確になることを報告している。これらの知見に鑑みて、存在論的恐怖が一貫性希求を生ぜしめるのだとすれば、自尊感情が低い者は、存在論的恐怖が顕現化する状況で自己に否定的な情報に接近し肯定的な情報を回避すると考えられる。対照的に、自尊感情が高い者は肯定的な情報に接近し、否定的な情報を回避すると考えられる。

## 主観的時間的距離とその再構成

本研究では上記の仮説を、学業領域における成功および失敗（同じ学期で成績の良かった試験と悪かった試験）の認知、特に主観的時間的距離に着目して検討する。主観的時間的距離とは、我々が出来事に対して抱く遠い近いといった主観的感觉である、主観的時間的距離と物理的時間的距離は一定程度正の相関関係を持つと考えられるが、両者が食い違うことがある。つまり、遠い過去の出来事がまるで昨日のことのように感じられたり、つい最近起こった物事が遙か昔のことのように感じられたりすることがある。

自伝的記憶は事実の写しではなく想起時に動機の影響をうけながら再構成されるものであり（高橋，2000），主観的時間的距離も再構成される側面の1つである（Ross & Wilson, 2002）。また、同じ時期に生じた成功と失敗の主観的時間的距離を指標として用いることで、実際の物理的時間的距離を統制しながら、現在の自己概念との関連で自己高揚と一貫性希求が相反する状況を設定することが可能である。これらの理由により、主観的時間的距離に着目することは本研究の目的に合致していると考えられる。

Ross & Wilson (2002) は、自己高揚動機の観点から、過去の肯定的自己の主観的時間的距離が、同時期の過去の否定的自己のそれよりも近く

なると論じている。これは、現在により近い（つまり主観的時間的距離の近い）過去の自己のほうに、現在の自己により強い含意を持つと考えられるためである。よって、存在論的恐怖が顕現化した後に自己高揚が生じるのであれば、過去の成功の主観的時間的距離がより近くなり（予測 1）、過去の失敗の主観的時間的距離は遠くなる（予測 2）はずである。

一方、一貫性希求が生じるのだとすれば、自尊感情が低い者は存在論的恐怖が顕現化する状況で現在の否定的自己に一致しない成功の主観的時間的距離がより遠くなり（予測 3）、一致する失敗の主観的時間的距離がより近くなる（予測 4）と考えられる。一方、自尊感情が高い者では、存在論的恐怖が顕現化する状況で現在の肯定的自己概念と一致しない失敗の主観的時間的距離が遠くなり（予測 5）、一致する成功の主観的時間的距離が近くなると考えられる（予測 6）。

## 実験 1

実験 1 では、前学期において成績の良かった試験（成功）もしくは悪かった試験（失敗）の主観的時間的距離に特性的自尊感情と存在論的恐怖が及ぼす影響を検討する実験を行い、前述の仮説について検証を行った。

## 方法

実験参加者 女子大学生 76 名（平均年齢 = 19.38,  $SD = .63$ ）が参加した。

手続き 実験は 2 つのセッションから構成されており、いずれも講義時間内に集団状態で実施された。

第 1 セッション 将来の研究のための予備調査という名目で、日本語版 Rosenberg 自尊感情尺度（山本，1982）を含む冊子に回答を求めた。回答



は1(あてはまる)～5(あてはまらない)の5件法で行われた。原版は10項目であるが、「私はもっと自分を尊敬できるようになりたい」という項目は自尊感情の低さと高さいずれを反映するのかが明確でなく、修正済み項目合計相関も極めて小さい値( $r=.03$ )であったので分析から除外した。残りの9項目の平均値で個人の自尊感情得点を定義した( $\alpha=.85$ )。

第2セッション 第1セッションの約1か月後に、青年期の社会的態度、記憶に関する調査という名目で実施した。第2セッションの調査票は、以下の質問紙から構成されていた。

①実験操作のための質問紙 存在論的恐怖を喚起する条件(存在論的恐怖条件)の参加者は死に関する質問20項目に1(全くあてはまらない)～6(とてもよくあてはまる)の6件法で回答した。これらの項目には、丹下(1999)、河合・下仲・中里(1996)、金児(1994)の尺度から収集したものと、著者が独自に作成したものが含まれていた。項目の選定にあたっては、死の意味に関する項目、他者との関係に言及した項目、死後の世界に関する項目は含めないよう配慮した。それらに関する項目は、死の不安よりも死に対する対処に関わる象徴的不死概念を活性化してしまうと考えられるからである。一方、統制条件の参加者は余暇の過ごし方に関する質問20項目に、1(全くしない)～6(非常によくする)の6件法で回答した。

②日本語版 PANAS(佐藤・安田, 2001) 存在論的恐怖の効果が主観的感情に媒介されないことを確認するために実施した。当該尺度は快感情8項目、不快感情8項目からなる尺度である。参加者は各項目に1(全くあてはまらない)～6(とてもよくあてはまる)の6件法で回答した。それぞれの項目の平均点で個人の快感情および不快感情を定義した(ともに $\alpha=.87$ )。また、存在論的恐怖の効果が顕れるのは一定の遅延を経た後である

(Greenberg, Pyszczynski, Solomon et al., 1994) ことが知られており、PANAS への回答は遅延時間の確保という目的も兼ねていた。

③ ETC 利用に関する項目 ETC(有料道路自動料金収受システム)の利用経験について尋ねた。当該項目も遅延時間確保のための課題である。遅延課題の数が1つの場合よりも2つの場合に存在論的恐怖の効果量が大きいたことが知られているため(Burke, Martens, & Faucher, 2010)、2つ目の遅延課題として採用した。

④想起課題 前学期(第2セッションのおよそ半年前)の試験について、最も成績の良かったもの(成功条件)もしくは最も成績の悪かったもの(失敗条件)を想起してもらい、その試験の科目名の記入を求めた。そのうえで、その出来事に対する主観的時間的距離を1(とても遠くに感じる)～7(とても近くに感じる)の7件法で尋ねた。主観的時間的距離の回答後、試験後にどの程度その試験のことを思い出したかの想起頻度を1(全く考えなかった)～7(繰り返し何度も考えた)の7件法で尋ねた。これは、想起頻度が主観的時間的距離に系統誤差として影響すると考えられるためである。さらに、出来事の思い出しやすさ、重要さ、望ましさといった側面も主観的時間的距離に影響することが考えられるため(Ross & Wilson, 2002)、それらを測定するSD法項目への回答を求めた。項目数は思い出しやすさ3項目( $\alpha=.81$ )、重要さ1項目、望ましさ8項目( $\alpha=.94$ )であった。

これらの尺度に回答し終わった後、デブリーフィングを行い、実験の真の目的を説明した。さらに、希望する場合は分析へのデータ使用を拒否できること、拒否した場合にも一切の不利益がないことを説明した。データ使用を拒否した参加者はいなかった。

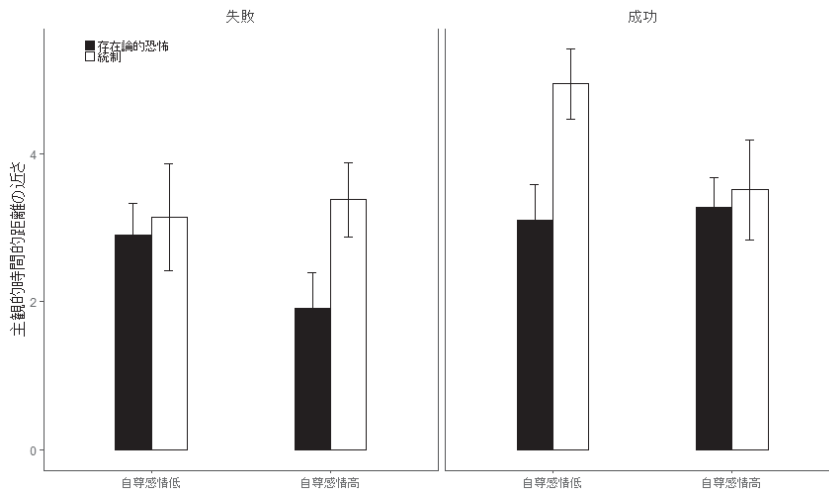


図 1.実験条件および自尊感情高(平均+1SD)および低(平均-1SD)ごとの成功および失敗の主観的時間的距離の予測値。数値が大きいほど主観的時間的距離が近いことを意味している。

## 結果と考察

**予備的分析** 実験条件間で自尊感情の高さに偏りがないかを確認するため、自尊感情得点を従属変数、実験条件を独立変数とする Welch の検定を行った。要因の効果は統計的に有意でなく ( $t(70.67)=.19, p > .84.$ ), 自尊感情について条件間差は見られなかった (存在論的恐怖条件  $M = 2.83$ , 統制条件  $M = 2.80$ )。

**主観的時間的距離に関する分析** 主観的時間的距離を従属変数、実験条件、想起する出来事の種類 (成功・失敗), 自尊感情得点およびそれらの交互作用項を独立変数、想起頻度, 思い出しやすさ, 重要さ, 望ましさ, 不快感情および快感情を共変量とする一般線形モデルによる分析を行った。自尊感情得点と交互作用項に多重共線性が生じるのを避けるため、自尊感情得点については平均値でセンタリングしたうえで分析に投入した。初期の分析の結果、重要さ, 望ましさ, 快感情につい

ては説明に寄与していなかったのでモデルから除外した。最終的なモデルは統計的に有意であった ( $R^2_{adj} = .32, F(10,65) = 4.61, p = .00$ )。

まず、実験条件 ( $\beta = -.28, t(65) = -2.73, p = .01$ ) の効果が統計的に有意であり、存在論的恐怖条件で主観的時間的距離が遠い傾向が示された。また、想起対象 ( $\beta = .25, t(65) = 2.42, p = .02$ ) の主効果も統計的に有意であり、失敗条件よりも成功条件で主観的時間的距離が近いことが示された。

これらの主効果は、実験条件×想起対象×自尊感情の交互作用により調節されていた ( $\beta = .49, t(65) = 1.76, p = .08$ )。この交互作用の様態を理解するため、自尊感情得点の高低 (平均±1SD) および成功, 失敗の組み合わせごとの実験条件の単純主効果を検討した。また、それぞれの組み合わせによる予測得点を図 1 に示した。自尊感情が低い場合には存在論的恐怖条件において統制条件よりも成功の主観的時間的距離が遠くなることが示された ( $\beta = -.53, t(65) = -2.81, p = .01$ )。また、自尊感情得点が高い場合に、存在論的恐怖条件におい

て統制条件よりも失敗の主観的時間の距離が遠くなることが示された ( $\beta = -.42, t(65) = -2.11, p = .01$ )。これらの結果は、それぞれ予測 3 と予測 5 を支持している。つまり、一貫性希求が生じることを示唆するパターンである。一方、自尊感情得点が低い場合に失敗の、また自尊感情得点が高い場合に成功の主観的時間の距離には存在論的恐怖の影響は見られなかった。つまり、予測 4 および予測 6 は支持されなかった。自尊感情が低い者にとっての失敗経験、ならびに自尊感情が高い者にとっての成功経験は、それぞれ自己概念と一致しており、精緻化されていると考えられる。そして、十分に精緻化された出来事の主観的時間の距離は、存在論的恐怖の影響を受けない可能性が示唆される。

共変量については、鮮明さ ( $\beta = .36, t(65) = 3.28, p = .01$ ) および想起頻度 ( $\beta = .23, t(65) = 2.01, p = .05$ ) の効果が統計的に有意であった。出来事の印象が鮮明であるほど、また想起する頻度が高いほど、主観的時間の距離が近いという結果が示された。これは主観的時間の距離の構成概念から予測される結果である。一方、否定的感情の効果は統計的に有意ではなかった ( $\beta = -.14, t(65) = -1.31, p = .19$ )。これは存在論的恐怖の顕現化の効果が主観的感情によるものであるという代替説明と整合しない結果である。

実験 1 では、自己高揚と一貫性希求が相反する状況において、存在論的恐怖が一貫性希求を動機づけることが示唆された。存在脅威管理理論において、自尊感情は存在論的恐怖を緩衝するメカニズムとして理論的に重要な位置を与えられている。その自尊感情を高める自己高揚よりも一貫性希求が優先される事態が存在することを示唆したことは、理論的な意義の大きいことである。

もっとも、自己高揚が生じなかったことについては、いくつかの説明が可能である。まず、自尊感情の指標として Rosenberg の自尊感情尺度を

用いたことが一因と考えられる。Rosenberg 自尊感情尺度は自己全体についての評価的感情を測定するものである。一方、自尊感情にはそのような全体的なもののみならず、評価領域ごとの固有なものが存在すると考えられている。評価領域についての行動には、全体的な自尊感情よりも領域固有の自尊感情の影響が強いと考えられる。このことは同時に、全体的自尊感情と領域固有の行動の対応が必ずしも明確ではないことを含意している。そして、今回想起対象としているのは、学業に関する出来事である。そのため、実験 1 において自己高揚が生じなかったのは、Rosenberg 自尊感情尺度が学業領域での自尊感情を十分に反映していなかったためと解釈することができる。

次に、学業領域の自己価値の随伴性を考慮していないことも原因として考えられる。自己価値の随伴性とは、個々の領域の評価が自己の全体的評価（つまりは自尊感情）に及ぼす影響の程度である (Crocker & Wolfe, 2001)。ある個人にとって随伴性の低い領域は自己にとって重要な含意を持たず、それゆえ自己高揚に用いられにくいことが考えられる。つまり、研究 1 において自己高揚が生じなかったのは、学業領域が参加者にとって随伴性の低い領域であったためであるという可能性が考えられる。よって、学業領域の記憶を題材として存在論的恐怖が自尊感情と一貫性希求いずれを動機づけるか公正に検討するためには、学業領域の随伴性を考慮することが必要である。

## 実験 2

実験 2 では前述の議論に基づき、学業領域の随伴性を考慮して存在論的恐怖と学業自尊感情が学業領域における達成事象の主観的時間の距離に及ぼす影響を検討する。随伴性の高い領域は自尊感情への影響が大きいという議論に鑑みれば、存在



論的恐怖が顕現化した場合の学業領域での自己高揚は、学業領域の随伴性が高い者で生じると予測される。つまり、学業領域の随伴性が高い者で、成功の主観的時間の距離が近くなり(予測7)、失敗の主観的時間の距離が遠くなる(予測8)と考えられる。

一貫性希求についてもやはり、個人にとって重要な領域ほど現れやすいと考えられる。また、実験1では自己概念と不一致な出来事の主観的時間の距離に存在論的恐怖の影響が見られた。これらを併せて考えると、学業領域の随伴性が高くかつ学業自尊感情が低い者は、存在論的恐怖が顕現化する状況で成功の主観的時間の距離がより遠くなり(予測9)、学業領域の随伴性が高くかつ学業自尊感情が高い者は、存在論的恐怖が顕現化する状況で失敗の主観的時間の距離が遠くなる(予測10)と考えられる。

## 方法

実験参加者 大学生99名(女性55名,男性44名) 手続き 研究1同様、実験は2つのセッションから構成されており、いずれも講義時間内に集団状態で実施された。

第1セッション 青年期の自己意識・自己評価に関する調査というカバーストーリーで実施した。調査票には、以下の2つの項目が含まれていた。

①学業自尊感情に関する項目 研究1の Rosenberg 自尊感情尺度にかえて、学業に関する自尊感情を測定する項目に回答を求めた。これらの項目は新見ら(2006)の尺度のうち学業に関する3項目と、Rosenberg 自尊感情尺度日本語版を参考に著者が独自に作成した2項目の計5項目で構成されていた。参加者はこれらの項目に1(全くあてはまらない)～7(とてもよくあてはまる)の7件法で回答した。5項目の平均点で学業自尊感情を定義した( $\alpha=.77$ )。

②学業の随伴性に関する項目 日本語版自己価値の随伴性尺度(内田, 2008)の学業能力下位尺度4項目を用いた。参加者は各項目に1(全くあてはまらない)～7(とてもよくあてはまる)の7件法で回答した。4項目の平均点で学業の随伴性得点を定義した( $\alpha=.68$ )。カバーストーリーの信憑性を担保するため、調査票には他の項目も含まれていたが、本研究の仮説には無関連であるので報告は割愛する。

第2セッション 実験1とほぼ同様の手続きを用いた。ただし、遅延時間の調整のため、PANASに「平静な」などの静的な感情を尋ねる6項目を追加して実施した。また、これら項目には1(全くあてはまらない)～7(とてもよくあてはまる)の7件法で回答を求めた。

## 結果と考察

予備的分析 実験条件間で学業自尊感情に偏りがないかを検討するため、実験条件を独立変数、学業自尊感情を従属変数とする Welch の検定を行った。実験条件の効果は統計的に有意でなく( $t(96.7)=.87, p=.38$ )、学業自尊感情について条件間差は見られなかった(存在論的恐怖条件  $M=3.70$ , 統制条件  $M=3.51$ )。

学業の随伴性得点についても Welch の検定を行った。実験条件の効果は統計的に有意ではなかった(存在論的恐怖条件  $M=3.99$ , 統制条件  $M=4.27, t(96.3)=-1.29, p=.20$ )。以上より、学業自尊感情および学業随伴性について、条件間に偏りはなかったと判断できる。

主観的時間の距離に関する分析 主観的時間の距離を従属変数、実験条件、想起する出来事の種類(成功・失敗)、学業随伴性得点、学業自尊感情得点およびそれらの交互作用項を独立変数とする一般線形モデルによる分析を行った。交互作用項

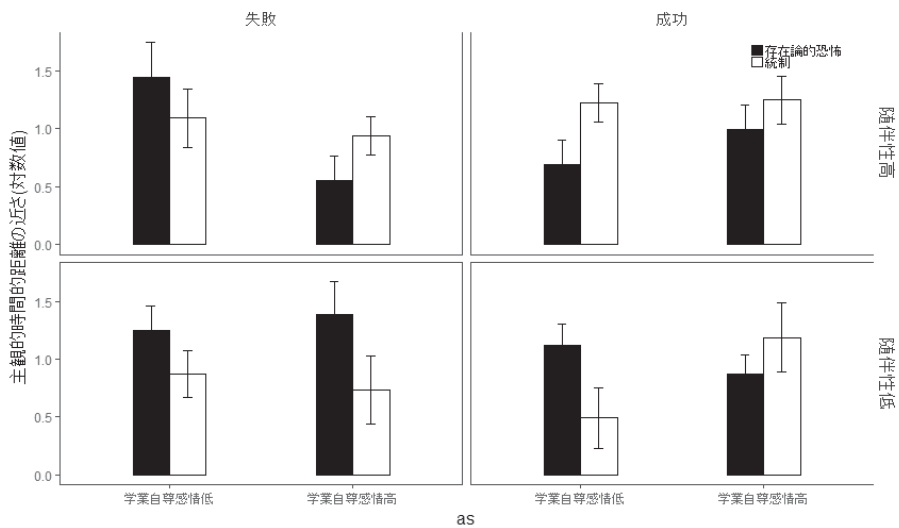


図 2.実験条件、学業随伴性と学業自尊感情の高低(平均±1SD)ごとの成功および失敗の主観的時間的距離の予測値(対数値)。数値が大きいほど主観的時間的距離が近いことを意味している。

との間で多重共線性が生じるのを避けるため、学業随伴性得点と学業自尊感情得点についてはそれぞれの平均値でセンタリングしたうえで分析に投入した。想起頻度、思い出しやすさ、重要さ、望ましさ、不快感情および快感情は共変量として分析に投入した。初期の分析の結果、残差が正規分布していなかったため、主観的時間的距離を対数変換して分析に用いた。対数変換した時間的距離を用いて同じモデルで分析したところ、重要さ、望ましさ、不快感情、快感情、想起頻度については説明に寄与していなかったためモデルから除外した。最終的なモデルは有意であった ( $R^2_{adj} = .17$ ,  $F(16,80) = 2.24$ ,  $p = .01$ )。

実験条件と学業随伴性の交互作用は5%水準で統計的に有意であった ( $\beta = -.23$ ,  $t(80) = -2.23$ ,  $p = .03$ )。また、出来事の種類の学業自尊感情の交互作用は10%水準で統計的に有意であった ( $\beta = -.21$ ,  $t(80) = 1.86$ ,  $p = .07$ )。これらの交互作用は、三次の交互作用によって調節されていた ( $\beta = .31$ ,  $t(80) = 2.60$ ,  $p = .02$ )。この交互作用の様態を検討す

るため、成功と失敗ごとに学業随伴性得点および学業自尊感情得点の高低(平均±1SD)の地点で単純傾斜検定を行い、実験条件の効果を検討した。また、それぞれの組み合わせによる予測得点を図2に示した。単純傾斜検定の結果、成功の主観的時間的距離が、学業自尊感情が低く、学業随伴性が高い場合には存在論的恐怖条件で統制条件よりも、遠くなっていた ( $\beta = -.47$ ,  $t(80) = -1.99$ ,  $p = .05$ )。これは予測9を支持するものであり、存在論的恐怖が顕現化する状況で一貫性希求反応が生じることを示唆するものである。一方、予測10を支持する結果は得られなかった ( $\beta = -.36$ ,  $t(80) = -1.50$ ,  $p = .14$ )。さらに、学業自尊感情と学業随伴性がともに低い場合には、存在論的恐怖条件で統制条件よりも、成功の主観的時間的距離が近くなる ( $\beta = .53$ ,  $t(80) = 1.97$ ,  $p = .06$ ) という、予測していなかった結果が得られた。この結果は存在論的恐怖の顕現化が自己高揚を動機づけることを示唆するものである。

共変量については鮮明さの効果のみが有意であ

り、鮮明なほど主観的時間的距離が近いという関係が見られた ( $\beta = .37, t(80) = 3.67, p = .07$ )。一方、実験1と異なり、想起頻度の効果は見られなかった。想起頻度の平均値は実験2 ( $M = 2.85, SD = 1.58$ ) において実験1 ( $M = 3.72, SD = 1.48$ ) よりも低く、床効果が生じていた疑いがある。そのため、主観的時間的距離に対する影響が見られなかったのだと考えられる。

## 総合考察

本研究では、学業領域における過去の成功および失敗の主観的時間的距離を指標として、存在論的恐怖が自己高揚を動機づけるのか一貫性希求を動機づけるのかという問題について検討した。実験1において、自尊感情が低い者は、存在論的恐怖が顕現化する状況で、自己概念と一致しない成功経験の主観的時間的距離をより遠く認知していた。さらに、実験2ではこの効果が学業領域の随伴性が高い場合、つまりは個人にとって学業領域が重要である場合にのみ生じることを示した。これらの結果は Landau et al.(2009) の結果と整合しており、一貫性希求が存在論的恐怖の管理に寄与する可能性を示唆するものである。さらに、Landau et al.(2009) と異なり、本研究では自己高揚と一貫性希求が相反する状況を設定して、その上で存在論的恐怖が一貫性希求を生ぜしめることを示している。存在脅威管理理論では、存在論的恐怖への対処において自尊感情が重要な役割を果たすと想定している。その自己高揚よりも一貫性希求が優先される場合があることを示したことは、存在脅威管理理論における自尊感情の位置づけの再検討や、自己高揚と一貫性希求の関連についてのさらなる研究の必要性を示唆するものである。

自尊感情が高い者については、実験1では存在論的恐怖が顕現化する状況で自己概念と一貫しな

い失敗経験の主観的時間的距離が遠くなるという、一貫性希求を示唆する結果が得られたものの、領域固有の自尊感情を用い、学業領域の随伴性を考慮した実験2では、得点のパターンこそ一貫性希求を示唆しているものの、その差は統計的に有意なものではなかった。もっとも、随伴性が高い場合の実験条件にかかる標準偏回帰係数は  $-.36$  と予測と整合する方向で一定の大きさを示しており、これが統計的に有意にならなかったのは検定力の不足に起因する可能性も考えられる。検定力分析を事前に行いサンプルサイズを決定した上で、改めてこの効果が見られるか否かを検討する必要があると考えられる。

一方、学業の随伴性が低く、学業自尊感情が低い者では、存在論的恐怖が顕現化する状況で学業領域での成功の主観的時間的距離が近くなるという結果が示された。肯定的な事象の主観的時間的距離が近くなることは、その肯定的な含意を現在の自己により強く反映させる行動だと考えられる。ゆえに、この結果は存在論的恐怖が顕現化する状況で、常に一貫性希求が自己高揚に優先されるわけではないことを示唆していると解釈することができる。一方で、学業の随伴性が低いということは、学業が個人の自己価値にとって重要ではないことを意味しており、そのような事象の主観的時間的距離が近くなることが、当人の自尊感情を高めることに寄与するか、つまり自己高揚として機能しているのかについては更なる検討の余地がある。

本研究は存在論的恐怖が顕現化する状況で一貫性希求が自己高揚に優先される場合があることを示したが、この知見の一般化可能性については制限がある。まず、本研究が日本人を対象として行われている点である。日本人をはじめ東洋人は、顕在的指標では自己高揚を示しにくいことが広く知られている (Yamaguchi, Greenwald, Banaji

et al.,1997)。本研究で検討したのもあくまで顕在的な自己高揚であるため、潜在的自己高揚が生じている可能性は排除できない。存在論的恐怖が顕現化する状況で一貫性希求と自己高揚の関係を十全に検討するためには、潜在的指標を用いた比較検討が必要である。また、本研究では学業領域の成功失敗に焦点を当てたが、知的能力など客観的に測定可能な領域では自己高揚的評価が生じにくく、優しさや誠実さなど多義的な領域で自己高揚の評価が生じることが報告されている(外山・桜井, 2001)。それゆえ、多義的な領域で一貫性希求と自己高揚を対立させた場合には、存在論的恐怖が顕現化する状況で自己高揚が生じる可能性が考えられる。今後の研究ではそのような領域差の検討も必要であろう。上記のような研究を通し、自己を通じた存在論的恐怖への対処の様態の理解を精緻化することが必要である。

## 引用文献

Becker, E. (1997). *The denial of death*. New York: Free Press Paperbacks. (Original work published 1973)

Boucher, H. C. (2011). Self-knowledge defenses to self-threats. *Journal of Research in Personality*, 45, 165-174.

Burke, B. L., Martens, A., & Faucher, E. H. (2010). Two decades of terror management theory: A meta-analysis of mortality salience research. *Personality and Social Psychology Review*, 14, 155-195.

Campbell, J. D., Assanand, S., & Paula, A. D. (2003). The structure of the self-concept and its relation to psychological adjustment. *Journal of personality*, 71, 115-140.

Cox, C. R., Goldenberg, J. L., Pyszczynski, T., & Weise, D. (2007). Disgust, creatureliness and the accessibility of death-related thoughts. *European Journal of Social Psychology*, 37, 494-507.

Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001) Contingencies of Self-Worth. *Psychological Review*, 108, 3, 593-623.

Dechesne, M., Greenberg, J., Arndt, J., & Schimel, J. (2000). Terror management and the vicissitudes of sports fan affiliation: The effects of mortality salience on optimism and fan identification. *European Journal of Social Psychology*, 30, 813-835.

Giesler, R. B., Josephs, R. A., & Swann Jr, W. B. (1996). Self-verification in clinical depression: the desire for negative evaluation. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 358-368.

Goldenberg, J. L., McCoy, S. K., Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Solomon, S. (2000). The body as a source of self-esteem: The effect of mortality salience on identification with one's body, interest in sex, and appearance monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 118-130.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., Burling, J., Simon, L., Solomon, S., Rosenblatt, A., Lyon, D., & Piel, E. (1992). Why do people need self-esteem: Converging evidence that self-esteem serves an anxiety-buffering function. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 913-922.

Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management

- theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self*: Springer-Verlag.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Pinel, E., Simon, L., & Jordan, K. (1993). Effects of self-esteem on vulnerability-denying defensive distortions: Further evidence of an anxiety-buffering function of self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 29, 229-251.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. J. (1994). The role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 627-637.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 61-139). New York: Academic Press.
- 金児曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観. 人文研究, 46, 537-564.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度. 老年社会科学, 17, 107-116.
- Landau, M. J., Greenberg, J., Sullivan, D., Routledge, C., & Arndt, J. (2009). The protective identity: Evidence that mortality salience heightens the clarity and coherence of the self-concept. *Journal of Experimental Social Psychology*, 45, 796-807.
- Mikulincer, M., & Florian, V. (2002). The effects of mortality salience on self-serving attributions-evidence for the function of self-esteem as a terror management mechanism. *Basic and Applied Social Psychology*, 24, 261-271.
- 新見直子・永瀬由里子・松田由希子・前田健一 (2006). 大学生の時間的信念に及ぼす自尊心の影響 広島大学心理学研究, 6, 151-156.
- Ross, M., & Wilson, A. E. (2002). It feels like yesterday: Self-esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 792-803.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9, 138-139.
- Sedikides, C., & Strube, M. J. (1997). Self-evaluation: To thine own self be good, to thine own self be sure, to thine own self be true, and to thine own self be better. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 209-269). New York: Academic Press.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 24., pp. 93-159) New York: Academic Press.
- 高橋雅延 (2000). 記憶と自己 多鹿秀継・太田信夫 (編) 記憶研究の最前線 北大路書房
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 外山美樹・桜井茂男 (2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72, 329-335.
- 内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値



の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証 心理学研究, 79, 250-256.

Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, 18, 498-500.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

#### 文末脚注

- 1：本論文は2012年11月18日に日本社会心理学会第53回大会において発表した内容を加筆・修正したものである。